Ⅱ　小学部の研究

1．　はじめに

（1）昨年度までの研究の経過

本校では平成５年度以来「豊かな心と生活をめざして」というテーマのもとに教育実践を行っている。

平成５～９年度は『かかわりあい』を育てたり、『その子らしさ』を発揮する場として小学部の集団学習「ランランタイム」を選び、その指導内容や指導方法の在り方について事例的、実践的試みを通して研究を行ってきた。[1. 2. 3)]

平成10年度から教育課程再編に向けて教科別の指導・領域別の指導のそれぞれの指導内容や指導方法について再検討を行う作業に着手した。

平成10年度は『からだづくり』に視点をあてて、「体育」「体育的行事」「養護・訓練の中の運動・動作」「生活」そして「休み時間」についてその指導内容や指導方法の在り方について再検討を行った。その結果、小学部における『からだづくり』では調整力をつけることが大切であり、そのためにはいろいろな『動き』を経験させることが必要であると再確認した。更に、『からだづくり』にはいろいろな集団や指導形態を準備することが必要であることも再確認した。また、「養護・訓練の中の運動・動作」においては平成３年度より子どもの実態を踏まえたグループ編成を行っているが、平成10年度の研究において、そのグループ分けの基準として、児童の体力の違いを考慮する面と同時に児童間の相性や同学級の児童を複数配属するなどの精神面での情緒の安定を考慮する面が必要であると再確認した。[4)]

（2）今年度の研究の概要

①今年度の研究の目的・内容・方法

今年度は教科の中の「生活」「音楽」「図画工作」について学級（学年）としての指導目標を教育課程の再編成という視点から再検討を行うことにした。今年度の研究の目的、内容、方法は以下のようである。

目的	教育課程再編に向けて低・中・高学年における指導の目標を再検討する。
内容	「音楽」「図画工作」「生活」について再検討を行う。
方法	実践的試行を行う中で指導の目標や内容について話し合いを重ねる。

②目標の在り方についての基本的考えかた

我々はこれまで学習指導要領に準拠して子どもたちがいろいろな知識・技能を習得したり、経験を積み重ねたりする方向で日々の実践に取り組んできている。そして、これからもこの姿勢は維持していくものである。今回の教育課程再編にあたり小学部として再確認をしておく必要があると考えたことは低・中・高学年における指導の目標の在り方ということである。目標の在り方の視点として以下の２つを挙げた。

視点１．低・中・高学年間に系統性（つながり）をもたせる
視点２．個人の実態を踏まえる

ａ．視点１．低・中・高学年間に系統性（つながり）をもたせる

本校小学部の週間配当時数は１組（低学年）・２組（中学年）が29時限、３組（高学年）が31時限である。学部集団の授業（部集会など）や能力別グループ集団の授業（国語科、算数科、養護・訓練）時数の10時限を除くと学級集団での授業時数は19～21時限である。つまり、１週間の授業時数のうち65％は学級集団での授業である。

今回、教育課程再編にとり上げた「生活」「音楽」「図画工作」は学級集団で行っている授業である。それゆえ、低・中・高学年間に系統性のある目標を設定することになる。

ここで言う「系統性（つながり）」は低・中・高学年の目標につながりがある、ということと学習指導要領に示す内容に沿いながら学年の進行に伴って子どもたちが実態に応じていろいろな知識・技能を習得したり、経験を積み重ねていけるような方向性をもつ、ということである。

ｂ．視点２．個人の実態を踏まえる

各学級（低学年・中学年・高学年）における各教科の目標の設定に際して大切なことは各教科の目標が子どもの実態を踏まえている、ということである。我々は過去５～６年間の本校の小学部の児童（抽選による入学）が進級していった様子を縦断的に間近に見てきた。この様子を踏まえて今年度、各学級ごとに適切な目標を設定することにした。

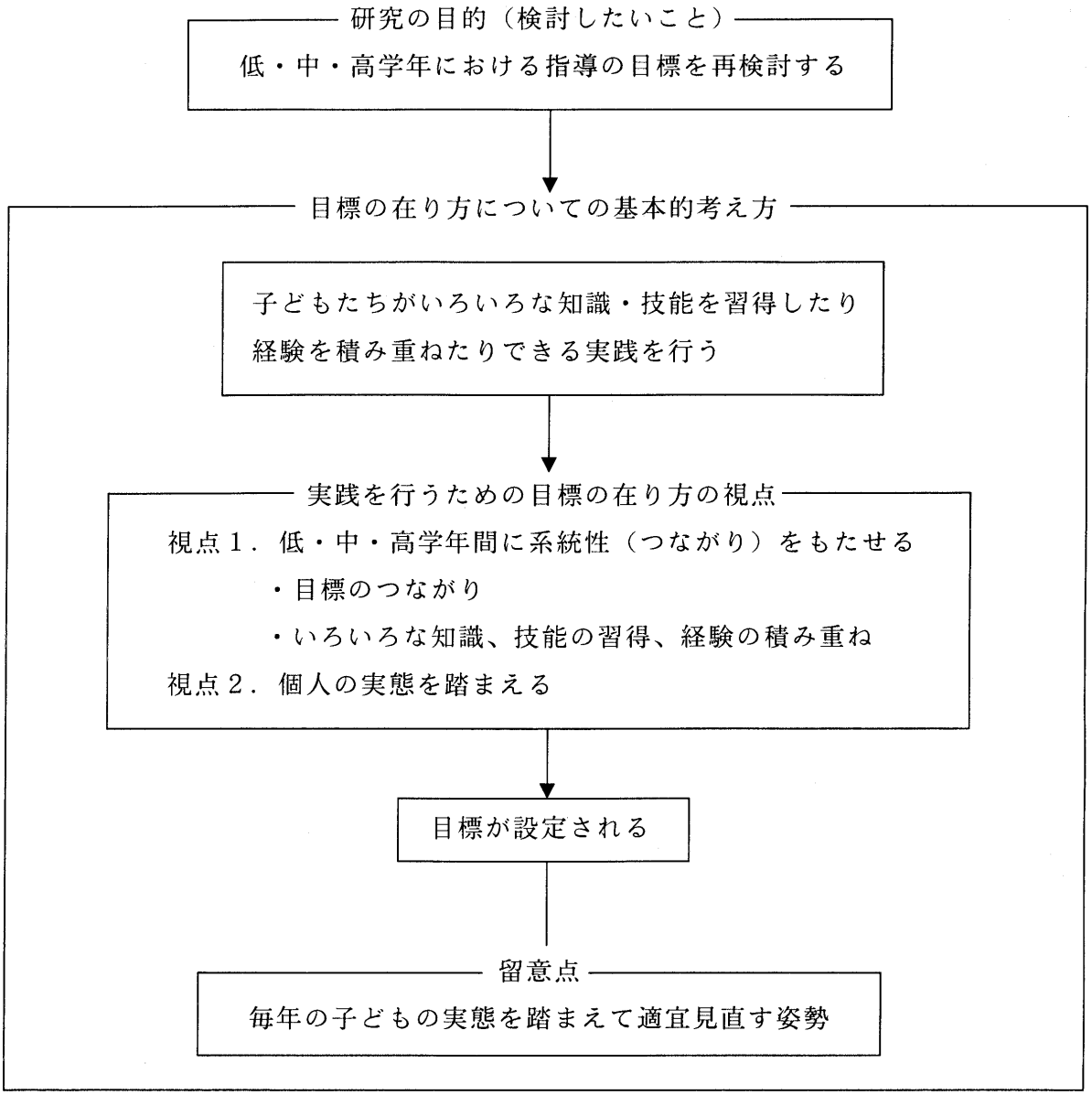
なお、これらの学年の進行に伴う目標の置き方はあくまで一つのめやすであり、児童の実態と著しくかけ離れた不適切な目標であることが明白であればその都度考えなおす必要がある。

それゆえ、学年の進行に伴う目標の置き方は、一方で学級（学年）の目標を参考にしつつ、もう一方である年度の低学年の児童６名が２年後、３年後に中学年、高学年と学年が進行するにつれて、彼ら６名の実態に応じた学年の進行に伴う、彼らなりの知識・技能の習得や経験の積み重ねをめざした目標になる。

例えば、現在中学年のある子は鍵盤ハーモニカで『だんご３兄弟』を演奏することができる。この子が高学年になった時の音楽の目標は他の旋律楽器を演奏したり、他の曲を演奏するというこの子なりの知識・技能の習得や経験の積み重ねをめざしたものとなる。

故に、ある年度には学級（学年）の目標の一部が改訂されたり、その学級の独自の目標が加わることも十分考えられる。

以上のような考えから我々は低・中・高学年における指導の目標は毎年の子どもの実態や学年を踏まえて適宜見直す姿勢が大切であると考えている。以上のことがらをまとめてみると次のように考えられる。



（３）「生活」「音楽」「図画工作」の各学級における目標の捉え方

各教科の目標は新学習指導要領[5]に明記されている。その目標に沿いながら、子どもたちがこれまでに学習したり、身につけたりしてきたと思われる知識、技能、経験を踏まえて本校の児童に合った学級別の目標を検討した。

①生活の目標の捉えかた

生活の指導の分野は現行学習指導要領解説書[6]では11分野と多岐にわたっている。その中でも「１基本的生活習慣」の分野は小学部においては指導に多くの時間を占めておりその指導内容・指導方法の再検討にも多くの時間を要すると考えている。そこでこの分野の目標の検討は来年度にまわすことにした。今年度は「１基本的生活習慣」の分野を除いた10の分野について目標を検討することにした。

低学年では、身近なことや季節の行事に関する活動を経験することで、生活の幅を拡げることをねらっている。また、仲間意識を育んだり、身近な自然に親しむことも大切であると考えている。

中学年では、季節・行事に関する活動や校外学習などを通して生活経験の幅を広げたり身近な地域・自然への関心を高めたい。また、係活動をすることで友だちや身近な人とのかかわりを広めたい。

高学年では、週番活動・清掃・グループのリーダーなどの係活動や合宿・修学旅行・栽培活動など、更に広がりをもった活動を通してより多くの人や自然や社会とのかかわり合いを広げたいと考えている。

②音楽の目標の捉えかた

小学部全体としては、歌う、聴く、楽器を鳴らす、からだを動かすなどの活動を通して音楽の楽しさを味わうことが大きな目標になる。

低学年ではいろいろな音に気づいたり、関心をもつことが大切である。また、楽器を鳴らしたり、いろいろな曲を聴いて豊かな感性を育むことが目標となる。

中学年では、曲を意識しながら打楽器を鳴らしたり、ものを使って曲に合わせて体を動かす活動を取り入れたい。また、友だちと一緒に歌ったり、楽器を鳴らしたりする活動も取り入れたい。

高学年では、友だちと一緒に歌ったり、一人で歌ったりする活動を取り入れたい。また、マリンバ、鉄琴、メロディーベルなどの旋律楽器を鳴らす活動も取り入れたい。

③図画工作の目標の捉えかた

低学年においては、身近な材料を使って、ダイナミックにからだ全部で触れたり働きかけたりする活動を中心とし、造形あそびの楽しさを十分に味わうことを目標とする。

中学年では、造形あそびをさらに発展させながらも材料や用具の経験の幅を広げ、児童一人一人が自分らしさを発揮していく過程を大切にしたいと考える。

高学年では題材や用途に応じた造形活動の経験も少しずつ増やしていきたいと考える。

以下に示す表1～3は生活、音楽、図画工作の学年別目標と学習指導要領の内容との関連を表したものである。

（新　保　利　久）

表Ⅱ－1 生活の学年別の目標と学習指導要領の指導内容との関連

○－関係がある　◎－特に関係がある

学年別の目標		学習指導要領の指導内容										
		1 基本的生活習慣	2 健康・安全	3 遊び	4 交際・挨拶	5 集団	6 手伝い・仕事	7 きまり	8 買物・金銭	9 自然	10 家庭・社会	11 公共施設
低学年	・身近なことや季節の行事に関する活動を経験することで、生活の幅を広げる。	○	◎	○	◎	◎	○	○	○			
	・友だちと一緒に活動に取り組んでいくなかで、仲間意識を広げる。			○	◎	◎						
	・身近な自然に親しむ。		○	◎				○		◎	○	○
中学年	・季節，行事に関する活動を行うことによって生活経験の幅を広げる。	○	◎	○	◎	◎	○	○				
	・係活動をすることで友だちや身近な人とのかかわりを広める。				◎	◎	◎					
	・公共施設を利用したり、散歩をしたりすることで身近な地域、自然への関心を高める。		○	◎	○			◎	○	◎	◎	◎
	・興味，関心のある活動を友だちと一緒に楽しむことで活動への意欲を高める。			○	◎	◎		○	○	○	○	○
高学年	・季節，行事に関する活動を行うことによって生活経験の幅を広げる。	○	◎	○	◎	◎	○	○				
	・集団の中で係活動をしたり、役割を担ったりすることで高学年としての意識を育てる。				◎	◎	◎					
	・公共施設を利用したり、栽培活動を行うことで、身近な社会、そして自然とのかかわりを広げる。		○	○	◎	◎	◎	○	○	◎	◎	◎
	・苦手なことにでも挑戦しようという気持ちを育てる。			○		◎	◎					

表Ⅱ－2 音楽の学年別目標と学習指導要領の内容との関連

○－関係がある　◎－特に関係がある

	学　年　別　目　標	学習指導要領の内容			
		鑑賞	表現	器楽	歌唱
低学年	・いろいろな音に気づき、関心を持つ。	○	○	○	
	・音楽に合わせて身体表現をしたり、楽器を鳴らしたりして楽しむ。	○	◎	◎	◎
	・いろいろな曲をきいて豊かな感性を育む。	◎			
中学年	・歌を歌うことの楽しさを味わう。		○		◎
	・曲を意識しながら打楽器を鳴らしたり、友だちと一緒に楽器を鳴らしたりする経験をする。		○	◎	
	・友だちと一緒に曲想を感じながら身体を動かす経験をする。	○	◎		
	・いろいろな曲をきいて音楽に親しみ豊かな感性を育む。	◎			
高学年	・歌を歌うことの楽しさを味わう。		○		◎
	・マリンバ、鉄琴、メロディーベルなどの旋律楽器を鳴らす。		○	◎	
	・曲想を感じながら身体を動かす。	○	◎		
	・いろいろな曲をきいて音楽に親しみ豊かな感性を育む。	◎			

表Ⅱ－3 図画工作の学年別目標と学習指導要領の内容との関連

○－関係がある　◎－特に関係がある

	学　年　別　目　標	学習指導要領の内容		
		造形遊び	表現	鑑賞
低学年	・身近な材料をもとにからだ全体を使って遊ぶ	◎	○	
	・身近な材料を使って楽しみながら自由にのびのびと表現する。		◎	
	・自分たちの作品を見る。			◎
中学年	・身近な材料の中でも、形や色や質感などに特徴のあるものと触れる機会を多くし、思いつく発想や連想を一人一人が自分なりに楽しむ。	◎	○	
	・身近な用具にも慣れ親しみ、いろいろな試みや工夫する楽しさを知る。		◎	
	・見たことや感じたことを絵にかいたり、作ったり、飾る経験をする。		◎	
	・自分の作品や友だちの作品を見る楽しさを知る。			◎
高学年	・いろいろな材料や用具や活動をさらに経験し、形や色や質感に慣れ親しむ。	◎	○	
	・見たことや感じたことを自分なりの方法で絵にかいたり、作ったり、それを飾ったり、使ったりする。		◎	
	・友だちの作品や身近な社会にあるいろいろな造形品を見る楽しさを知る。			◎

2．実践

（1）生活

①1組（低学年）の実践

ア．目標

・身近なことや季節・行事に関する活動を経験することで、生活の幅を広げる。
・友達と一緒に活動に取り組んでいくなかで、仲間意識を育む。
・身近な自然に親しむ。
・散歩をしたり、遊具で遊んだりすることで、楽しみながらからだづくりを行う。

イ．年間計画

月	単　元　・　題　材	主な行事
4	たのしいがっこう	春の遠足
5	おかあさんありがとう　あさがおをそだてよう いも苗うえ	運動会 交通安全教室
6	バラ園・菖蒲園にいこう　おとうさんありがとう	
7	七夕飾りを見にいこう	七夕まつり
9	つくってたべよう　教生先生ありがとう	ぶどうがり
10	いもほり　やきいもをしよう	秋の遠足
11	どんぐりひろい　おちばひろい　つくってたべよう	表現会
12	バザーをしよう　つくってたべよう	クリスマス子ども会 バザー
1	ゆきあそび　つくってたべよう	
2	ゆきあそび　つくってたべよう	まめまき そりすべり
3	6年生ありがとう　つくってたべよう もうすぐ2年生・3年生	ひなまつり 6年生を送る会

［年間を通して行う活動］

ティータイム　「さんぽにいこう」「こうえんであそぼう」

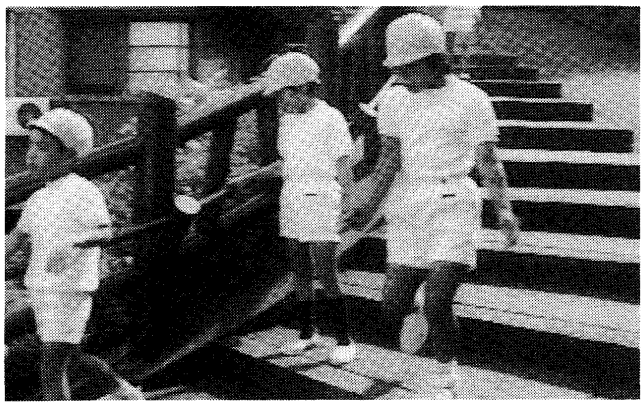
ウ．実践例

本学級の児童は１年生３名、２年生３名の計６名である。低学年なので楽しく無理なく取り組める活動を設定した。今年度の主な活動として、昨年度に引き続き、散歩や遊具を使った遊びを通したからだづくりとともに、簡単なおやつを作って食べることも取り入れた。生活の授業は水曜日と土曜日に各２時限ずつあり、教師は３人体制で指導を行なっている。

ａ．「さんぽにいこう」「こうえんであそぼう」

本学級の子どもたちは、入学時には歩き方がおぼつかなく長い距離を歩いた経験のない子がほとんどであった。そこで、みんなで散歩にでかけることでその楽しさを味わい、歩くことにも慣れてほしいと考えた。また、さまざまな遊具のある公園へでかけ、固定遊具などで思いきり遊ぶことを通して、楽しみながらいろいろな身体の動きを経験してほしいとも考えた。

散歩では、ある程度しっかり歩けるようになってきた２年生が１年生とペアになり手をつないで歩くことにした。学校近辺の道は坂や階段が多く、どのようなコースを選んでも歩き応えがある。車のあまり通らない細い路地では、友だちと手を離してそれぞれのペースで歩くことを促した。ただ歩くだけではなく、途中で神社にお参りしたり池の鯉を見たりし、休憩時にはおやつを食べたりしながら楽しんで歩けるよう配慮した。兼六園や城址公園を巡ったあとに茶店で餡ころ餅を食べるなど、観光客気分を味わったこともある。初めのうちは、玄関を出てすぐに座り込んだり抱っこしてほしがったりした１年生も、少しずつ歩く時間を延ばしていくうちにだんだん長い道のりを頑張って歩けるようになってきた。また、坂道や下り階段が苦手だった子も何度も歩いているうちに慣れてきて、元気に歩く姿が見られるようになった。歩きながら教師が口ずさむ「さんぽのうた」も気に入っているようで、１時間を越える散歩も平気になり、友達と一緒に歩くことも上手になってきた。

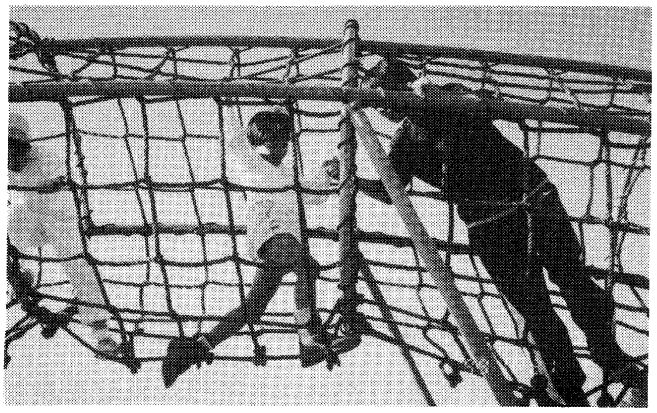


坂道上って　階段下りて

歩くこと自体を楽しむこととは別に、目的地を訪ねるために歩くこともあった。商店街の七夕飾りを見に行きハンバーガーショップでジュースを飲んだり、作品展を見にデパートへでかけたりといった活動である。市内を回る小さな「ふらっとバス」に乗るという経験もした。満開の花を見に公園へでかけたり木の実を拾いに行ったりするなど、季節を感じられる活動も大切にし

この一杯がたまらないっ！

た。かなり長い距離になるが目的地に着くとホッとした表情になる。一息入れたあと、また元気に歩きだす姿にはたくましさを感じさせられた。



ネットトンネル　おっとっと！

学校のワゴン車に乗って、大型固定遊具やアスレチックのある公園へでかける活動も行なった。どの子も遊具で遊ぶことは大好きである。また、公園によって様々な遊具があるので子どもたちはいつも意欲的に遊んでいた。歩くときには興味あるものに次々に目を奪われて足元がおろそかになりがちな子や、つまづきやすくて転ぶことのある子も、揺れる吊り橋やネット、不安定な丸太やタイヤの上などではしっかり手元や足元を見て進む様子が見られた。自分の気に入った遊具やコースで繰り返し遊んでいる子もおり、存分に身体を動かして楽しんでいるようであった。また、滑り台で遊びたくて自分で階段を上ったものの怖くて滑り下りられなかった子が、教師と一緒に滑っているうちに一人で滑ることができるようになったり、ブランコが嫌いだった子が自分からブランコに座り、後ろから押してもらって笑顔で揺れを楽しむようになったりするなど、遊びの幅も少しずつ広がってきている。

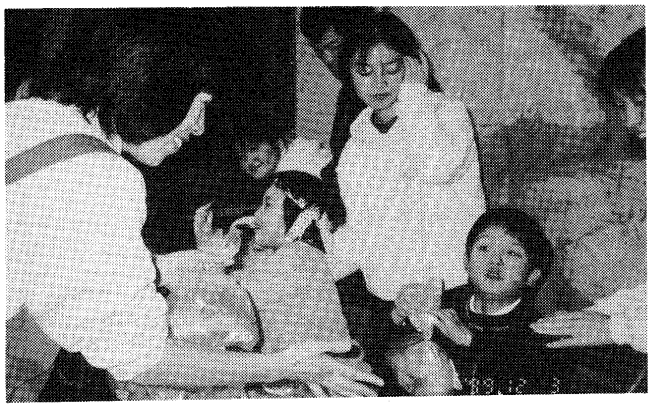
活動を積み重ねていくうちに、外へでかけるために帽子をかぶったりズックをはきかえたりといった日常生活面の動作もスムーズになるなどの成果も感じられる。外遊びが大好きな女の子は、休み時間になると、散歩のときにいつもみんながかぶる黄色の帽子を引き出しを開けて取り出し、外へ行きたい気持ちを表現するようになってきた。「外へでかけよう」「みんなで行こう」ということが嬉しい子どもたちである。

b．「つくってたべよう」

本学級の児童は、どの子も食べることへの関心が強く、土曜日に行なっているティータイムではとても嬉しそうにおやつを味わっている姿が見られる。そこで散歩に行かないときには、みんなで簡単なおやつを作って食べようということにした。調理はほとんど初めての子どもたちなので、包丁を使わず、入れる、混ぜるなど簡単な手順でできるおやつとして、まず、ホットケーキを取り上げた。それぞれの子どもたちにできる仕事を分担し、みんなで協力して作ることを大切に考えた。衛生面や安全面には充分留意し、子どもには難しいことは教師が行う様子を見せたり、手を添えて一緒にしたりして楽しく無理なく取り組めるように配慮した。初めは、焼いてから食べるということがわからなくて、早く食べたくて泣きだす子や、焼く前からホットケーキのタネやシロップに手を伸ばして味見しようとする子がいて賑やかであった。活動を重ねていくうちに焼いたら食べられることがわかってきたようで、でき上がるまで待つことができるようになってきた。また、ホットプレートが熱いということがわかって怖くてそばまで近寄れなかった子も、教師と一緒に取り組むうちに慣れてきて、一人で落ち着いてフライ返しでホットケーキを裏返せるようになった。ホットケーキにかけるソースはいろいろな味のものをいくつか用意しており、自

分の好きなものを選んでかけておいしそうに食べる姿が見られる。ホットケーキ作りに徐々に慣れてきた頃に、作るだけではなく調理器具を準備する活動も取り入れた。ボールや食器などを教室まで運ぶ様子はいそいそとして嬉しそうである。自分で皿を運んだあとに時間割カードの中から「ホットケーキづくり」のカードを選び教師に見せにくる子もいて、これからどのような活動をするのかという見通しが少しずつもてるようになってきた。

ぐるぐるぐる　おいしくな～れ！



手作りカップケーキはいかが？

同じホットケーキの素を使ってカップケーキ作りも行なった。アルミカップにタネをそっと流し込むのはなかなか難しかったが、手元を見て集中して取り組む様子やもっとしたいという意欲的な姿が見られた。12月のバザーでは4種類のカップケーキをたくさん焼いて店を出して販売し、好評を得た。小学部のクリスマス子ども会では1組がティータイムの担当となり、前日にチョコレート味のカップケーキを焼いてみんなに味わってもらった。

今後は、作るおやつの種類をふやしたり、食べたあとの片付けをしたりするなど、子どもたちの様子を見ながら活動の幅を広げていきたいと考えている。

エ．まとめ

「さんぽにいこう」や「こうえんであそぼう」の活動で、階段や坂道を歩いたり、固定遊具で遊んだりするうちに、子どもたちは無理なくからだづくりができてきたようだ。足に装具をつけている子は足首がしっかりしてきて、秋頃から装着時間を短縮することができた。学級便りで折々の散歩コースや子どもたちの様子を読んだ保護者からは、そんなに長い距離を歩けるとは思わなかったなどという驚きの声も寄せられた。4月当初には予想もつかなかった子どもたちの成長が嬉しく思われる。「つくってたべよう」の活動においても回を重ねるごとに、子どもたちが楽しく落ち着いておやつ作りに取り組む姿が見られた。低学年においては、いろいろな活動を経験していくことと共に、子どもにとって見通しのもちやすい活動をいくつかに絞って、根気よく積み重ねていくことも大切であると感じた。その際、同じことを繰り返すことでマンネリ化しないように工夫し、子どもの様子を見ながら無理なく活動の幅を広げていくことが必要であるのはいうまでもない。

季節的、行事的な活動については、子どもたちがこれから毎年繰り返し経験していくものが多い。低学年としてはその第一歩として楽しく無理のない適切な内容を設定して大切に取り組んでいきたい。

（神　谷　みつ江）

②２組（中学年）の実践

ア．目標

・季節・行事に関する活動を行うことによって生活経験の幅を広げる。
・係活動を通して友だちや身近な人とのかかわりを広げる。
・公共施設を利用したり散歩をしたりすることで身近な地域、自然への関心を深める。
・興味関心のある活動を友だちと一緒に楽しむことで活動への意欲を高める。

イ．年間計画

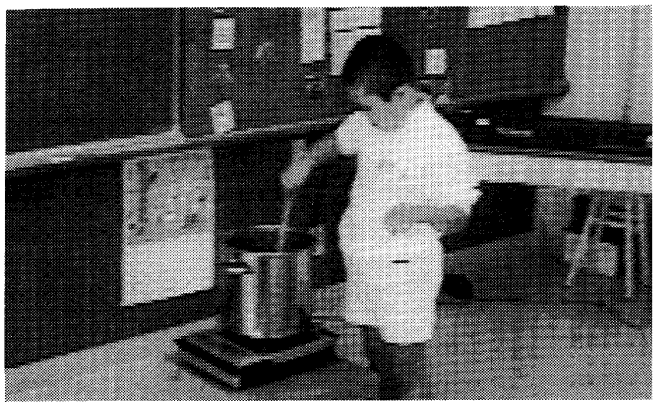
月	単　元・題　材	主な行事
4	新しいクラス　道路の歩き方	春の遠足
5	染め物をしよう　お母さんありがとう	交通安全教室 運動会
6	七夕飾りを作ろう　お父さんありがとう	
7	かき氷を作ろう	七夕まつり
9	買い物に行こう　色水遊び	ぶどうがり
10	合宿をしよう　表現会にむけて	秋の遠足 ２・３組合宿
11	やきいもをしよう　バザーにむけて	表現会
12	クリスマス子ども会にむけて	バザー クリスマス子ども会
1	雪遊び　お正月の遊び	
2	雪道の歩き方　６年生を送る会にむけて	まめまき そりすべり
3	アルバムを作ろう	ひなまつり ６年生を送る会

［年間を通して行う活動］

「ティータイムをしよう」「壁面を作ろう」「散歩に行こう」　校外学習

ウ．実践例

２組には３年生３名、４年生３名の計６名が在籍している。生活の授業は木曜日と土曜日に各２限ずつあり、教師２名体制で指導を行っている。３、４年における活動内容は、１組において経験してきた活動をふまえ、係や役割を意識した活動や地域社会に出ていく活動、友だちと一緒に楽しめる活動等経験の種類や幅が広がってくる。



染料をつくる

ａ．「染め物をしよう」

簡単な調理学習を経験してきた子どもたちにとって染め物は、鍋に入れて煮る・かき回す等活動として重なる部分も多いので興味関心がもちやすいと考え、調理器具や食材を使った染め物に取り組むことにした。

染め物では、染料として笹の葉・ハーブティー・コーヒー・藍・緑茶・みかん・玉ねぎ等を準備した。媒染は明礬を使った。子どもたちの活動としては、糊を落とすために布を洗う、染め模様を出すためにたこ糸で布を縛る、染料の材料を細かく切る、鍋で煮る、染料の入った鍋に布を入れる、乾かしてたこ糸をはずす等がある。

水遊びが好きな子が多いので、布を水の中に入れたり、布を絞ったりという活動を意欲的に行う子が多かった。染料を作る時には笹の葉を手でむしったり、はさみで細かく切ったりした。鍋に水を入れて沸かす時には、調理に似た期待感、好奇心から鍋をのぞき込んだり、湯気を興味深く見たり、沸騰する音をじっと聞いたりしていた。実際に染める時には、鍋の中にそっと布を入れたり、長い棒を突っ込んでぐるぐる布をかき回したりした。染め上がった布を見て、染める前の白い布との違いを発見する子もいた。また、完成した染め物を「６年生を送る会」のプレゼントとして使うことで友だちへの意識を高めたいと考えている。

ｂ．「ティータイムをしよう」「買い物に行こう」

ティータイムは年間を通した活動の一つである。主に各週の土曜日や校外学習の中で行っている。１組では、ティータイムそのものを楽しむことをねらいとしてきた。２組ではティータイムの時間にお茶を配ったりする活動を取り入れている。ティータイムでは、好きなおやつを選んだり、おかわりしたりしながら食べることで、みんなで食べる楽しみを感じることができた。お茶を入れる活動は、お茶の入っているやかんやポットから、自分のコップに少しずつお茶を注ぐだけであるが、一人で挑戦したり、教師と共に行ったりした。お茶をこぼしてし

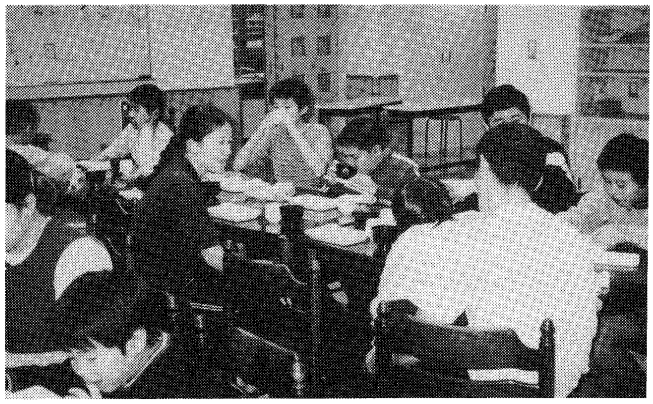
好きなお菓子を買えたかな

まったり、うまく一人でできない子もいるが、経験を積むということで今後も続けていきたい。

ティータイムに関連した単元に「買い物に行こう」がある。家庭ではどの子も家族と一緒に買い物に行った経験がある。そこで、ティータイムのお菓子を買いに行くという活動を準備することで、見通しをもって買い物に行くことを経験させたいと考えた。また、クラス全員で買い物に行くことで、友だちと一緒に買い物をする楽しみを味わわせたいと考えた。さらに、お店に買い物に行くことで、身近な地域社会との接点を作っていきたい。お店は歩いて５分の近くの小売店や歩いて15分のスーパーであり、道中は短い散歩となった。お菓子を選ぶ子、店内をいろいろ見て回る子、買った品物が入った袋を手に意気揚々と帰る子など子どもたちの買い物を楽しむ様子が見られた。

ｃ．「合宿をしよう」

３年生にとっては入学以来初めての宿泊学習であり、子どもばかりでなく家族の人たちも緊張と不安を抱く行事である。４年生は、３年生の時に合宿を経験しているので活動に見通しをもっている子もいる。合宿に向けては、家庭で詰めてきたカバンから持ち物を出し入れしたり、重いカバンをかついだりする活動を取り入れることで合宿への期待感をもたせようと考えた。



みんなで楽しい夕食

合宿当日、パジャマ、お風呂セットをてきぱきとカバンから出したり、慣れない重いカバンをふらつきながら運んだりする子どもたちの姿が見られた。泣いたり、寂しがったりする子もなく、遊んだり、テレビを見たり、お風呂に入ったり、食事をしたりすることで友だちと一緒に過ごす楽しさを味わうことができた。

エ．まとめ

２組の生活の学習には、１組の時にはなかったいろいろな活動を取り入れることにした。１組の時に経験した行事等の慣れ親しんだ活動を繰り返し行うことに加えて、染め物等の新しい活動を経験することで生活における活動の幅や種類が広がり、活動に対する意欲も高まったと考える。また、買い物や合宿等いろいろな場面で友だちと一緒に活動することを楽しむ姿が見られた。２組では友だち意識が高まる時期であり、このような友だちを意識して行う活動をこれからも積極的に取り入れていきたい。

（能　村　重　信）

③３組（高学年）の実践

ア．目標

・季節・行事に関する活動を行うことによって生活経験の幅を広げる。
・集団の中で係活動をしたり、役割を担ったりすることで高学年としての意識を育てる。
・公共施設を利用したり、栽培活動を行うことで、身近な地域や社会、そして自然とのかかわり合いを広げる。
・苦手なことにでも挑戦しようという気持ちを育てる。

イ．年間計画

月	単　元・題　材	主な行事
4	新しい３組	春の遠足
5	合宿をしよう　おかあさんありがとう	交通安全教室 運動会　３組合宿
6	楽しい修学旅行　「ふらっとバス」に乗ろう バラ園・菖蒲園に行こう　かき氷屋さん	３組修学旅行
7	作って食べよう（じゃがいもを使って） 七夕飾りを見に行こう　もうすぐ夏休み	七夕まつり
9	パチンコ・パズルゲームをしよう 浦田先生におたよりをだそう　教生先生ありがとう	ぶどうがり
10	合宿をしよう　表現会に向けて　招待状を配達しよう	秋の遠足 ２・３組合宿
11	作って食べよう（さつまいもを使って）　バザーに向けて	表現会
12	バザーに向けて　作って食べよう（そば粉を使って） クリスマス子ども会に向けて　冬休みに向けて	バザー クリスマス子ども会
1	雪遊びをしよう　文集をつくろう	
2	作って食べよう（さつまいもを使って）　文集をつくろう ６年生を送る会に向けて	まめまき そりすべり
3	卒業式に向けて	ひなまつり ６年生を送る会

［年間を通して行う活動］

「誕生会のプレゼントを作ろう」「アルバムを整理しよう」

「植えよう・育てよう・収穫しよう（じゃがいも、さつまいも、そば、麦、水仙）」

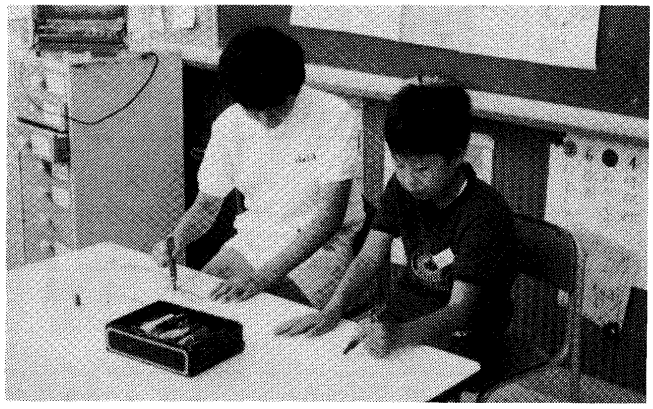
「ティータイムをしよう」

ウ．実践例

本学級は５年生３名、６年生３名の計６名で構成されている。教師は２人あるいは３人体制で、時数は月曜日２時限、水曜日３時限、土曜日２時限、計７時限で指導を行っている。活動内容は目標を踏まえ、学校生活の中のトピック的なこと、季節・行事的なこと、そして子どもの興味・関心を大切にし、これまでに経験してきたことを活かして、それらをより深めたり、広げたりできるものとした。また、３組になって初めて経験する活動も加えた。

ａ．「誕生会のプレゼントを作ろう」

本学級の子どもたちの中には、年少の友だちにかかわりをもとうとしたり、世話をしようとしたりするなど、高学年としての意識をもち始めている子がいる。３組の役割として、毎月の誕生会のプレゼントを作ることを任されており、これを機に役割意識をもたせるきっかけとして本単元を設定した。今年度はプレゼントとしてペットボトルビーズを用いたブレスレットや写真立てを作ることにした。



きれいに色をぬろう

年間を通しての活動であったため、プレゼント作りに見通しをもって取り組む姿が見られた。また、作ってあげる友だちのことを思い浮かべたり、プレゼントを作ることそのものを楽しむ姿が見られた。誕生会ではそのプレゼントをうれしそうに手渡したり、電気係（会場の照明を点灯、消灯する係）に意欲的に取り組んだりする姿が見られた。

ｂ．「作って食べよう」

本学級の子どもたちは、簡単な調理の経験があり、食べることや作ることに興味・関心がある。そこで、栽培活動で収穫したものを使っての調理を取り上げた。これまで経験したかき混ぜたり、つぶしたりする活動に加え、新たに包丁で切るという活動も取り入れた。

包丁で切る活動に関しては、最初は包丁を持つのも恐がっていた子や、切るときに力の入れ具合がわからない子など様々であった。回を重ねるごとに恐怖心は薄れ、教師と一緒に包丁を持って切ったり、材料をきちんと切ることができるようになった。切る厚さも調整できるようになった子もいた。また、合宿では夕食に食べるスープ作りを担当し、みんなで協力して作った。

にんじん、うまく切れるかな

今後は調理学習の作る手順を増やすことにより、今までにない道具の使用や調理方法の経験を増やしていくよう心掛けたい。また、自分たちで食べるだけでなく、１組や２組の友だちにおすそわけしたり、招待したりするために調理するという機会も設

けていきたい。

c．「楽しい修学旅行」

修学旅行は３組になって初めて経験をする。みんなと一緒に旅館での宿泊や入浴、食事など普段の学校生活では経験できない活動をすることで楽しく過ごしている姿や大きな声であいさつする姿が見られた。博物館などの公共施設の利用において、展示物に触れないことや静かに見学するなどという社会的なマナーを守ることが必要であることを、実際の場で体験できた。

ファミリーレストランでの昼食

エ．まとめ

年間計画からもわかるように、活動内容が多岐に渡っているが、学校生活に沿ったものになっているので、子どもたちは無理なく活動に取り組んでいた。これまでの１組、２組での経験を自分なりに消化し、力にして、活かしているように思われ、「さすが、３組さんだね。」と言われる姿が頼もしく見えた。

今後も、子どもたちの現在そしてこれからの将来の姿を念頭に置き、保護者の意向も反映していきながら、今何が必要なのかを見極めたうえで、活動内容を精選していきたい。このことが、子どもたちの生活の幅を広げる一助になることを期待している。

（寺　倉　万　喜）

（２）音楽科

①１組（低学年）の実践

ア．目標

・いろいろな音に気づき、関心をもつ。

・音楽に合わせて身体表現をしたり、楽器を鳴らしたりして楽しむ。

・いろいろな曲を聴いて音楽に親しみ、豊かな感性を育む。

イ．年間計画

月	表現			鑑賞（おんがくをきく）
	歌唱（うた）	器楽（がっきあそび）	身体表現（うたあそび）	
4	先生とお友だち おはながわらった	あつまれのうた（タンバリン） おおきなたいこ（大太鼓・小太鼓）	先生とお友だち おはながわらった	はじめの一歩
5	こいのぼり 春のまきば	ことりのうた（鈴・ミニチャイム）	こいのぼり 春のまきば	おかあさん （音楽鑑賞教室）
6	ながぐつマーチ かたつむり あめふり	ながぐつマーチ（小太鼓・タンバリン） かえるの合唱（ギロ・マラカス・鈴・タンバリン）	ながぐつマーチ かたつむり あめふり	てるてるぼうず あめふりくまのこ
7	きらきら星 アイアイ	きらきら星（ツリーチャイム）	きらきら星 アイアイ	たなばたさま シャボン玉
9	とんぼのめがね すいすいとんぼ	虫の声（ギロ・マラカス・鈴・タンバリン） こおろぎ（鈴・トライアングル）	とんぼのめがね すいすいとんぼ	あかとんぼ ゆうやけこやけ
10	村まつり やきいもグーチーパー まつぼっくり	豊年太鼓（和太鼓）	村まつり おおきなおいも まつぼっくり	里の秋 たきび
11	みのりの秋 どんぐりころころ おもちゃのチャチャチャ	豊年太鼓（和太鼓） どんぐり（どんぐりころがし） おもちゃのチャチャチャ（手作り楽器）	みのりの秋 どんぐりころころ	まっかな秋 ちいさいあきみつけた （音楽鑑賞教室）
12	さあかざりましょう サンタクロース	ジングルベル（メロディーベル・鈴） 赤鼻のトナカイ（鈴） あわてんぼうのサンタクロース （小太鼓・鈴・タンバリン・シンバル）	さあかざりましょう サンタクロース わらのなかの七面鳥	きよしこの夜 星に願いを ブランデンブルグ協奏曲
1	冬のさんぽ やっぱりおとしだま こんこんくしゃんのうた	もちつき（大太鼓） おへそのうた（タンバリン・カスタネット）	もちつき やっぱりおとしだま ネバネバもち	北風小僧の寒太郎 たこあげ
2	まめまき ホットケーキのうた 雪のこぼうず	まめまき（大太鼓・小太鼓・マラカス） ゆき（木琴）	おにのパンツ ホットケーキのうた 雪のこぼうず	ペチカ エーデルワイス
3	うれしいひなまつり みんなのはる ともだちのうた	げんきにゆっくり（手作り太鼓） 春のことり（笛など）	うれしいひなまつり みんなのはる ともだちのうた	空より高く どこかで春が

ウ．実践例

本学級の児童は１年生３名、２年生３名の計６名である。一斉に歌を歌ったり、リズムに合わせて楽器を鳴らしたりするのは難しいが、音楽を聴いて楽しそうにからだを動かす子、自分の好きな歌を部分的に口ずさむ子、流れる歌に耳を傾けている子など、どの子も音楽は好きだと思われる。低学年ということで、40分間の授業を一つの曲や内容で構成することは子どもの集中力の持続という点で難しい面がある。そこで１時限の中に、うたあそび、がっきあそび、おんがくをきくという３つの活動を取り入れ、興味をもって楽しく学習に取り組めるように工夫した。歌唱の学習は、歌うのが難しい子どもたちなので、うたあそびの導入部分で教師が歌うのを聴き、歌に親しむという活動になる。音楽の授業は週１時限あり、教師は３人体制で指導を行なっている。

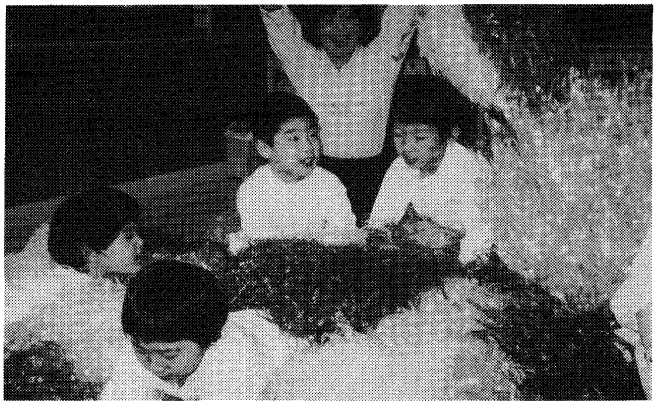
ａ．うたあそび

音楽に合わせて楽しく、その子らしく活動できることを大切に考えて、題材を設定し、教材を工夫した。

「ながぐつマーチ」では、いろいろな色や大きさの長靴や傘を準備した。子どもたちは自分の好きな長靴を履き、気に入った傘をさして、歌に合わせて自由に教室を歩いて回った。ブカブカの長靴を選んでゆっくり歩く子、自分の長靴を履いて軽やかに歩く子など、それぞれに楽しそうであった。普段は自分で傘をさして歩くことのほとんどない子どもたちなので、授業で初体験となった子もいた。一人で傘をさせない子は教師と一緒にあいあい傘で歩き、それもまた楽しいものであった。

「かたつむり」では、ブロックを置いたデコボコ道やロープで作った渦巻きの上を一人ずつかたつむりになって進んだ。這うというのはどの子も取り組みやすい姿勢である。腹這いになってほふく前進したり、四つ這いで力強く歩いたり、道の途中で寝そべったり、近道をしたりと個性あふれるかたつむりを表現していた。

「あめふり」では、歌に合わせてホワイトボードにペンで縦線を勢いよくたくさん描いて大雨を降らせ、「きらきら星」では、静かな雰囲気のなかでマグネット付きの金色の星を一つずつゆっくりと黒い紙に貼っていった。「おどるポンポコリン」では、よく知っているアニメキャラクターの絵やお面が登場して子どもたちは大喜びし、繰り返し賑やかに踊ったり、ラジオカセットの前でじっと歌に聴き入ったりする様子が見られた。「村まつり」では、友達や教師と共に神輿を担ぎ、うちわを振って祭りの雰囲気をみんなで楽しんだ。



ぼくたち「わらのなかの七面鳥」だよ

うたあそびでは、季節感のある曲や子どもがよく知っている歌を取り上げてきた。その子らしい表現を見逃さずに認めるとともに、それを促すような働きかけを心掛けている。また、日頃あまり経験していないことや友達を意識して一緒に楽しめるよう

なことを盛り込んで、教師も共に楽しめる活動にしたいと考えている。

b．がっきあそび

楽器を鳴らすという経験が少ない子どもたちであるため、主に、扱いやすい打楽器を取り上げた。

「かえるの合唱」では、鈴やマラカス、タンバリンなどいくつかの楽器を用意し自分の好きな楽器を選んで歌に合わせて自由に鳴らした。いつも同じ楽器を手にする子、前回とは違う楽器を選ぶ子など興味の示し方もいろいろであった。「ながぐつマーチ」では、小太鼓、和太鼓、タンバリンを中央に配置してそのまわりをばちを持って歩き、歌詞の「ドンドン」に合わせてサッと近くの太鼓を叩くという即時打ちの活動を楽しんだ。「きらきら星」では、ツリーチャイムを手で鳴らして、やさしい音色や余韻のある響きに親しんだ。「豊年太鼓」では、まつりばやしの音に合わせてはっぴ姿の教師が和太鼓を力強く叩くのを見て、子どもたちも両手にばちを持ち、和太鼓の音を元気良く響かせた。

がっきあそびでは、教師が楽器を鳴らすのを聴くことで楽器の音に興味をもたせる。自分も楽器に触りたい、鳴らしたいという気持ちを大切にしたいと考え、リズムに合わせて鳴らすということにはこだわっていない。楽器を鳴らすこと、鳴らしているのを聴いたり見たりすることを楽しみたいと考えている。また、本来は1組の子どもたちにとって扱いが難しいようなトライアングルやシンバルなどの楽器であっても、簡単に鳴らせるように工夫することによって楽しむことができる。既成の楽器だけでなく、たとえば風鈴や手作り楽器を用いたり、どんぐりの転がる音に耳を傾けたりなど、楽しい活動をいろいろ盛り込んでいきたい。

「豊年太鼓」ドンドコドン!!

エ．まとめ

音楽の授業の始まりを意識させるため、導入としていつも「あつまれのうた」を歌うことにしている。その中で名前呼びやタンバリンの即時打ちを促しており、これは徐々に身についてきている。授業の流れはいつもだいたい同じようにすることにしており、活動の見通しがもちやすいように黒板に「1．うた」「2．がっき」「3．きく」というように書いている。一つ一つの活動が短いため、子どもたちも興味をもって取り組めるようである。

賑やかな曲と静かで落ち着いた曲を交互に流した授業では、回数を重ねるうちに子どもたちにも曲想の違いがわかってきたようで、それに合わせて教師とともにリラックスしたり楽しく踊ったりする姿が見られた。また、音楽鑑賞では教師の奏でるバイオリンの音色やトーンチャイムの演奏にじっと耳を傾ける様子が見られ、テープから流れる曲だけでなく、身体に響いてくる生の音楽に低学年のうちから触れることで一層感性が育まれるのではないかと思われた。そういう意味では、題材の設定や活動内容にさらに幅や深みをもたせていくことが大切であろう。

（神　谷　みつ江）

②２組（中学年）の実践

ア．目標

・歌を歌うことの楽しさを味わう。

・曲を意識しながら、打楽器を鳴らしたり、友だちと一緒に楽器を鳴らしたりする経験をする。

・友だちと一緒に、曲想を感じながらからだを動かす経験をする。

・いろいろな曲を聴いて音楽に親しみ、豊かな感性を育む。

イ．年間計画

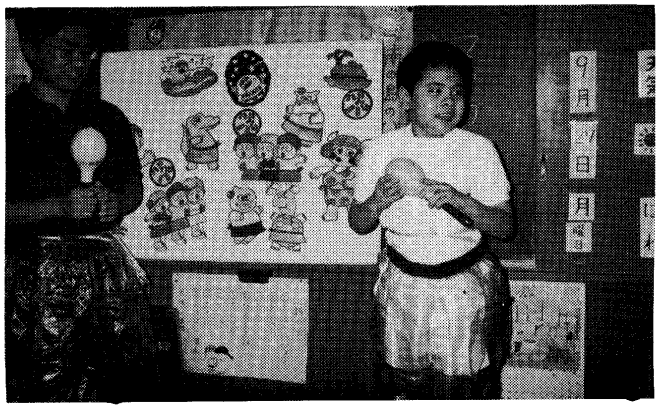
月	表　　現			鑑　　賞
	歌　唱	器　楽	身体表現	
4	「チューリップ」	タンバリン	花をもって揺れてみよう	「朝」など
5	「かえるの合唱」	ギロ	太鼓の音にあわせて動いてみよう	「夢のなか」など （音楽鑑賞教室）
6	「だんご３兄弟」	タンバリン、鈴 鍵盤ハーモニカ	踊ってみよう	「サウンド・オブ・サイレンス」など
7	「たなばたさま」 「うみ」	ツリーチャイムなど	笹を振ってみよう ゆっくり歩いてみよう	「美女と野獣」など
9 10	「南の島のハメハメハ大王」	マラカス、タンバリン、コンガなど	踊ってみよう 「波の効果音」（演奏） 青い布を動かしてみよう 「ララルー」 友だちと一緒にフープを使って	「ドナウ川のさざ波」など
11	「大きなかぶ」	タンバリン 和太鼓など	からだを揺らしてみよう	「カノン」など （音楽鑑賞教室）
12	「あわてんぼうのサンタクロース」 「きよしこの夜」	タンバリン、鈴 ツリーチャイムなど	ゆっくり歩いてみよう	クリスマスソング
1 2	「ゆき」 「ゆきのこぼうず」 「まめまき」	タンバリン、鈴 ウッドブロック マラカスなど	雪を降らせてみよう リボンやフープを使って踊ろう 音にあわせて歩いてみよう	「スケーターズ・ワルツ」など
3	「うれしいひなまつり」 「おもいでのアルバム」	和太鼓 トーンチャイム	輪になって踊ろう	「四季」など

ウ．実践例

本学級の児童は３年生３名、４年生３名の計６名である。音楽の授業は教師２人体制で週１時限、行われている。好きな歌を口ずさむ子、音楽がなると楽しそうに声をだす子、リズムにあわせて楽器を鳴らせる子、楽器の音を楽しんでいる子など音楽に対するかかわり方はいろいろであるが、子どもたちは全員音楽が好きである。そこで、音楽にふれながら、声をだしてみたり、からだを動かしてみたり、楽器を鳴らしてみたりすることを通して、音楽にさらに親しみ、楽しみ方を広げたいと考えている。また、少しずつ友だちを意識する様子が子どもたちの間に見られるので、「一緒に」という活動も取り入れたいと考えている。

ａ．楽器を鳴らそう

２組で、楽器演奏で使用する楽器は主に打楽器である。１組で十分親しんできた楽器を使用することで、子どもたちは楽器そのものの音を楽しむだけでなく、曲を意識しながら鳴らすことができると思われる。



体全体を使ってリズミカルに

「南の島のハメハメハ大王」ではタンバリン、マラカス、コンガなどを使用した。楽しいリズムに自然にからだを動かしながら鳴らす子、メロディーのリズムに合わせて鳴らす子の様子がみられた。また、一人では難しい子も、教師が一緒に鳴らしたり、からだでリズムをとったりすることで、曲を意識しながら楽器を鳴らそうとしていた。

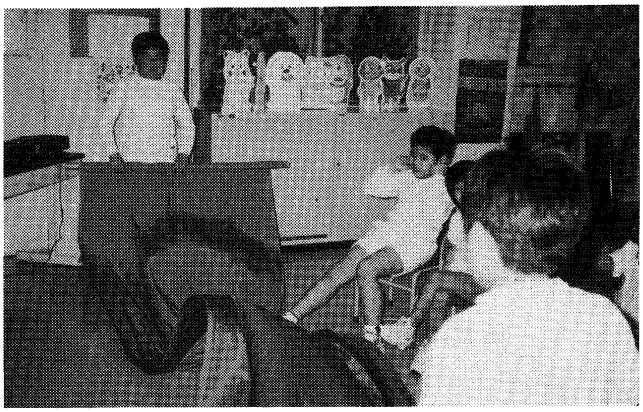
「だんご３兄弟」は、今年度とても流行した曲であり子どもたちも大好きな曲であるので取り上げてみた。また、この曲で旋律楽器である鍵盤ハーモニカを使ってみた。好きな曲であるため楽しんで演奏したり、少し難しい部分も頑張ろうとする様子が見られた。予定では鍵盤ハーモニカ、鈴、タンバリンを使って子どもたちだけで合奏してみようと思っていたが、みんなで合わせるということは難しく、教師の伴奏に合わせてという形になった。しかし、構成をもっと考えることによりできたのではないかという思いもあり、今後の課題にしていきたい。

ｂ．曲にあわせてからだを動かしてみよう

曲のイメージにあわせて、からだを動かすことはなかなか難しいことである。模倣から始まって、いろいろな表現の仕方を経験していくなかで、少しずつ自分の動きがでてきてほしいと考えている。また身体表現の活動を考える際「もの」を持つことで子どもたちが動きやすくなると考え、布やフープなどを取り入れた。一つのものを二人で一緒に持つことで相手の動きも意識しやすくなるのではという思いもあった。

「曲にあわせて布を振ってみよう」では、波をイメージした曲にあわせて二人ずつペアになって青い布を振ってみた。布を動かすことは子どもたちにとって楽しいものであり、自分から大きく布を振ろうとする様子が見られた。また、見ている子どもたちも布の動き

をじっと見つめたり、「じゃぼーん」と言いながら布の上に乗りたがったりしていた。



「二人で波をつくる」

二種類の曲を準備し、大きく振ったり、小さく振ったりという動きを経験してほしいと思い、教師が最初にしてみせるときにその部分を強調したり、子どもたちが行っているときに横で声かけをしてみたりした。曲を聴き自分で振り方を変えるという点では少し難しかった子が多かったが、中には曲を聴き「大きく」ではなく「速く」動かす子の姿も見られた。

「一緒に踊ろう」では、ゆっくりとした曲を使って、二人一組で１つのフープを持ち、曲にあわせてからだを動かしてみた。フープは持ちやすく、くぐったり、一緒に持って回ったりといろいろな動きをとりいれやすいものである。最初は教師と、そして慣れてくると、子ども同士でペアを作ってみた。友だちを意識する姿がみられるようになってくる２組では、曲とともに相手の友だちの動きを意識したり、あわせようとする様子がみられた。ゆったりとした曲にあわせてからだを動かすことを心地よく感じている様子が子どもたちの表情から感じられた。また、二人一組という形は自分の動きを制限されるというより、一人ではできない動きを経験できる形として捉えていきたい。その際、一緒に持つものを曲にあわせてもっと吟味する必要を感じた。

エ．まとめ

２組では音楽に対してのかかわり方を広げていくことで、音楽を楽しんでもらいたいと考え取り組んできた。一つの曲を使っていくつかの活動内容を取り入れることで、子どもたちは何度もその曲を聴く機会を持ち、休み時間や、家庭などで口ずさんでいる姿が見られたり、鍵盤ハーモニカを使ったことが家庭での遊びの一つとなったというううれしいこともあった。また、二人一組でからだを動かしてみるという活動では、お互いに相手にあわせようとする姿も見られ、新しい発見であった。リズム打ちなど、子どもの自由に鳴らしたいという思いと大人側のリズムを意識させたいという思いの兼ね合いの難しさや、楽器の経験を広げるための活動内容などこれから考えていかなければならないことも多い。しかしその際には音楽を楽しむということを大切に、これからも考えていきたい。そして授業で行った活動が子どもたちの生活の中に広がり、楽しみの一つになってくれればと願っている。

（森　　佳　子）

③３組（高学年）の実践

ア．目標

・歌を歌うことの楽しさを味わう。

・木琴、鉄琴、メロディーベルなどの旋律楽器を鳴らす。

・曲想を感じながらからだを動かす。

・いろいろな曲を聴いて音楽に親しみ、豊かな感性を育む。

イ．年間計画

		表　　現			鑑　賞
月	題材名	歌　唱	器　楽	身体表現	
4 5	かっこう	合唱・独唱 （皆と一緒に歌う。 皆の前で歌う。）	トライアングル カスタネットなど メロディーベル　鉄琴など	かっこうのペープサートを持って揺らす	バッヘルベルのカノン だんご３兄弟
6 7	アマリリス	↓	マリンバを自由に鳴らす		白鳥 （音楽鑑賞教室） こきりこ節
9 10	虫の声	↓	鈴、ギロ、マラカス、メロディーベルなどを使って合奏をする		エリーゼのために トルコ行進曲
11 12	ポンポンピアノ	↓	キーボードや和太鼓を歌詞に合わせて鳴らす	歌詞に合わせてステップをふむ	四季 （音楽鑑賞教室） クリスマスソング
1 2	オーラリー	↓	マリンバ、リコーダーなど	オーラリーの曲でダンスをする	春の海 クラリネットポルカ
3	ありがとう さようなら	↓	メロディーベルなど	歌いながらからだを揺らす	ハンガリー舞曲

ウ．実践例

本学級の児童は５年生３名、６年生３名の計６名である。音楽の授業は教師２人体制で週に１時限行っている。

歌うことや聴くことが好きな子が多く、テレビで聴いた「だんご３兄弟」などを歌っている子や、毎週木曜日の昼休みに校内で行っているカラオケの部屋へ行く子もいる。器楽ではこれまでに太鼓、タンバリン、カスタネットなどの打楽器を鳴らした経験があるが旋律楽器を鳴らした経験はあまりない。また、リトミックやフォークダンスでは一人でできる子もいれば教師と一緒ならできる子もいる。

そこで、３組の児童にとってその子なりにより音楽を楽しめるようになるために更にいろいろな知識・技能の習得、経験の積み重ねを念頭において学習活動を計画した。

指導にあたっては、子どもたちが新しい歌に十分慣れるように、一つの歌で歌唱・器楽・表現の活動を行うようにしたり、一つの歌の学習期間を約２か月と長めに設定するようにしたりした。また、単語や単音だけの一語発話段階の子がいるので、歌唱に取り上げる歌として歌詞の中に擬声語や擬態語が含まれる歌を取り入れるようにした。

ａ．歌唱

「アマリリス」はこの歌の歌詞に『ラ、リ、ラ、リ、ラ、リ、ラ』という部分があり、一語発話段階の子でも歌唱に参加できると思い取り上げた。

マイクを持って一人で歌う

歌が好きな６年生のある子は１時間目の授業で歌の題名の「アマリリス」を覚えた。そして２時間目の授業では歌詞の一部を歌うことができた。また、音楽が好きな５年生の子は１時間目の授業では立って曲に合わせて体をゆらしていた。２時間目の授業では、メロディーに合わせて声を出していた。一語発話段階の子は歌の中で教師の『ラ、リ・・』を復唱することができた。どの子もその子なりに歌唱に参加できた。

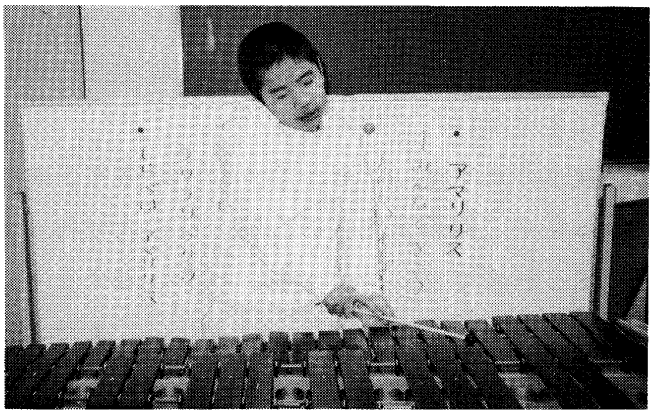
「虫の声」は秋の歌として毎年歌われており、児童にとっては比較的なじみのある歌といえる。歌詞の中の『チンチロ』や『リンリン』などの同じ音節の繰り返しがあり、この部分で歌唱に参加できる子もいると考えた。

毎年この歌を歌ったり、聴いたりしているためか１時間目の授業から歌詞を覚えて歌う子もいた。また、『あーおもしろい、むしのこえ』とおわりの方を歌うことができる子もいた。気分がのらないとなかなか話さない子はこの歌はよく知っていて安心したのかおわりの方の『むしのこえ』を歌っていた。

ｂ．器楽

「アマリリス」では旋律楽器のマリンバを子どもたちの前に提示した。教師が布製のカバーがかかっているマリンバを押して教室にはいると、どの子も一斉に注目した。カバー

をはずしてマリンバが姿をあらわすとどの子も「おや何かな？」というような表情を見せた。教師がドの鍵盤を１回ポンとたたいてみせると心地よい響きの音が出てそれが子どもたちの興味をいっそう引きつけたようだった。教師の「鳴らしてみたい人。」の声かけに日頃引っ込み思案の子が「ハーイ」と手を挙げた。そして、いろいろな鍵盤をたたいてどんな音がでるのか確かめているようだった。また隣合った３音ぐらいの鍵盤をバチでなでるようにして音を出すことを楽しんでいる子もいた。別のある子はグリッサンドをした時の音がおもしろいようで何度もバチを左右に動かしていた。



マリンバを鳴らしてみる

「虫の声」では後半は種々の楽器に触れる経験をさせるねらいで虫の声の擬声語の箇所で鈴、ギロ、メロディーベル（ソとラの音）、マラカスを鳴らすという活動を行った。日頃は耳に手をあてていることが多く、手で物を持ってもすぐに離してしまうことがみられるある子は歌が終わるまでマラカスを持って前に立つことができた。また、教師の合図をよく見ていてメロディーベルを鳴らすことができた子もいた。またある子は指揮者の真似をして前へ出て腕を振っていた。どの子もその表情は生き生きとしていた。

エ．まとめ

高学年の音楽の授業では１年生から４年生までの音楽の学習の積み重ねの上に新しい歌や楽器を取り入れて、学習活動を更に拡げることをねらった。

歌唱では、新しい歌の歌詞を書いた紙を黒板にはると「こんどの歌は何かな。」という表情をみせる子もいた。２度、３度と歌を聴くうちに題名を覚えたり、歌詞の一部を歌ったりする様子がみられた。

器楽では、子どもたちはそれぞれの楽器のそれぞれの音色を聴く体験ができたと思われる。また音の出し方で、振ったりバチを左右に動かしたり、といろいろな奏法を体験できた。３組の音楽の授業ではこうした体験・経験を積むことが大切であると考えている。休み時間に音楽の授業で習った新しい歌のメロディーを口ずさむ子がいたり、マリンバやキーボードや和太鼓を触りに来る子が見られるようになった。音楽の授業が子どもたちの生活の幅を拡げる一つのきっかけになることを願っている。

（新　保　利　久）

（３）図画工作科

①１組（低学年）の実践

ア．目標

・身近な材料をもとに、からだ全体を使って楽しむ。

・身近な材料を使って、楽しみながら自由にのびのびとかいたりつくったりする。

・自分たちの作品を見て楽しむ。

イ．年間計画

月	題　材	材料と活動
4	クレヨンでかこう	絵の具、クレヨン；自由にかいてはじき絵に …
5	手がたもよう 足がたもよう	絵の具；大きな紙に手形を押して … 絵の具；大きな紙の上を歩き回って …
6	コロコロもよう ポンポンもよう	絵の具；ローラーを転がして … 絵の具；タンポでたたいて …
7	紙をそめよう あわせ絵をしよう	絵の具；障子紙を折って絵の具で染めて … 絵の具；色画用紙に筆で描くデカルコマニーに
9	こむぎこねんどであそぼう	小麦粉；水で溶いた小麦粉で自由に指絵を …
10	しんぶん紙であそぼう	新聞紙；破ったり、引っ張ったり、丸めたり …
11	ロールペーパーであそぼう 土ねんどであそぼう	ロールペーパー；ちぎって、ぬらして、しぼって 土粘土；ちぎったり、丸めたり、重ねたり …
12	紙ねんどでつくろう	紙粘土；板に自由に貼り付けて …
1 2	ちぎって、はろう	色紙や包装紙など；ちぎって、貼って … お花紙；丸めて、貼って …
3	紙はんがをしよう	紙、毛糸、布、絵の具；貼り付けて、こすって …

ウ．実践例

本学級の児童は、１年生３名、２年生３名の計６名である。図画工作の授業は木曜日に２時限続きであり、教師は４人体制で教室で指導を行なっている。

からだを動かすのが大好きで元気に走り回っている子、いろいろなものに興味を示し遊びを見つけて楽しんでいる子、教室の隅で紙を細かくちぎって遊んでいる子など、その様子は様々である。この子どもたちが一緒に取り組み楽しめる活動として、からだ全体を使っていろいろな材料にダイナミックに働きかける活動を設定することにした。

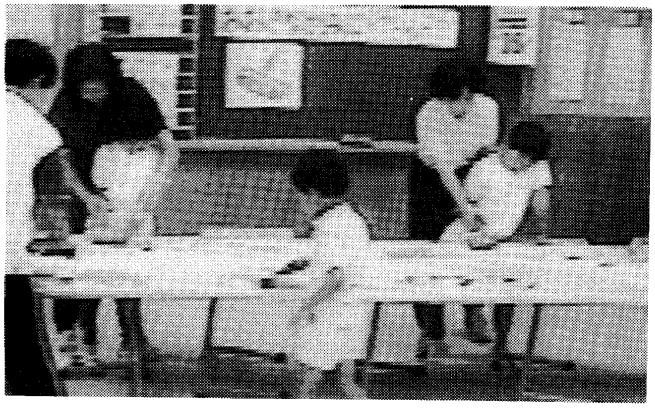
身近な材料として絵の具、粘土、紙を主に扱い、同じ材料にある程度の期間、継続して取り組むことにした。そうすることで、その材料に一層慣れ親しむことができ、活動にも見通しがもちやすくなるのではないかと考えた。作品を作るということにはこだわらず、みんなと一緒の活動の中でその子らしさを大事にし、教師も共に楽しむことを心掛けた。

ａ．「コロコロもよう」

絵の具には、たくさんの色があり、色も彩やかで混色できる。水の溶き具合によって、濃さもいろいろに調節できるため、子どもたちが自由に表現する活動には扱いやすい材料である。本題材の前の「手がたもよう」や「足がたもよう」では、絵の具の感触を手のひらや足の裏で存分に味わいながら、教室に広げた大きな模造紙が、自分の身体の一部である手や足の模様でいっぱいになるのを楽しんだ。

さらに、大きな模造紙に自由にのびのびと表現する楽しさや喜びを経験させたいため、ローラーでの活動を取り上げた。ローラーは、一度に広い面を塗ることができ、自由にのびのびと表現する活動に適した道具である。

テーブルを合わせて、その上に段ボール紙に模造紙を３枚貼り合わせたものを敷き、絵の具を８色、ローラーも８本用意した。子どもたちは、ローラーの回転する面白い動きに引きつけられ、目をきらきらと輝かせた。自分の好きな色の絵の具を選んで、ローラーをコロコロと動かしたり、次々と色を変えて色の重なりを楽しんだり、また自分の手のひらにローラーを転がして手形を押したりする子など、それぞれが興味をもって楽しんで取り組む姿を見ることができた。また、模造紙にあらかじめ模様になる型紙を貼っておき、ローラーを転がす活動の後に剥がして、浮き出たいろいろな模様を楽しむ活動も取り入れた。このことで、子どもたちは出来上がった自分たちの作品に一層興味をもつことができた。



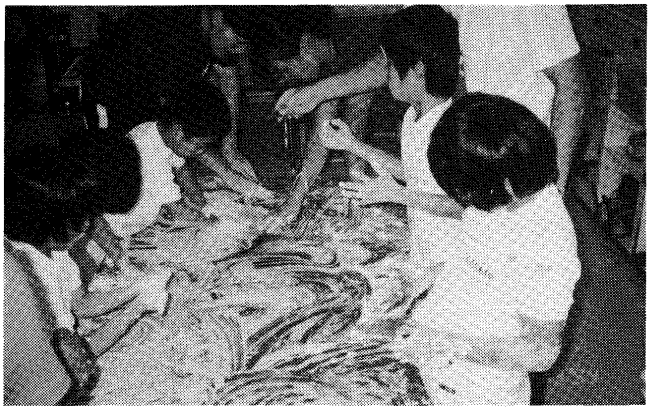
ローラーでころころもよう

「コロコロもよう」の作品は七夕飾りを作るときに利用し、また違った形でその色合いを楽しむことができた。

ｂ．「こむぎこねんどであそぼう」

粘土は、直接手で触れることにより、肌でその感触、堅さ、柔らかさ、冷たさ、ぬくもりを感じ取ることができる。また、いろいろな形に変化させることができるため、子どもたちが自由に思い思いに働きかけるのに適した身近な材料である。粘土には土粘土、紙粘

土、油粘土などいろいろな特長を持つ種類があるが、本題材では粘土を使った造形あそびの導入として、小麦粉粘土を材料に選んだ。小麦粉は、溶く水の量によってその状態も様々になり、手で触れることにより変化のある感触を味わうことができる。また、活動中万一口に入れても害はない。



ぬるぬる　ぐちゃぐちゃ　楽しいな

テーブルに、ポリ袋で覆った大きな段ボール紙を敷き、小麦粉を２袋分まき散らした。子どもたちは、小麦粉を手にすくって散らし、小麦粉のふわっとした軽い感触やさらさらと落ちる様子を楽しんだ。しばらく楽しんだ後に少し水を加えると、団子状のパラパラとした感触になりそれも楽しい。もっともっと水を加えると、今度はぬるぬる、べとべと。赤と緑の食紅を振りかけ、子どもたちが手でぐちゃぐちゃすると、今まで白かった小麦粉が綺麗なピンクや淡い緑の色に変身。小麦粉粘土が彩やかな色になっていくのを喜び、さらにぐっちゃぐっちゃ。小麦粉粘土に大胆に働きかけ、服やズック、髪の毛までにも小麦粉粘土をつけて、にこやかな表情で活動を楽しんでいた。小麦粉粘土特有の感触を十分に感じ取ることができたように思う。

次の題材「土ねんどであそぼう」でも、大きな土粘土の塊に対して思い思いにちぎったり、丸めたり、重ねたり、くっつけたりと生き生きと取り組む姿が見られた。

エ．まとめ

１組では、絵の具、粘土、紙などの身近な材料にからだ全体で働きかけるダイナミックな活動を教師と共に楽しんできた。ここでいうダイナミックな活動とは、着席したままのこまごまとした机上での活動ではなく、広いスペースで自由にのびのびと材料に夢中になって働きかけるからだ全体を使った造形あそびだと捉えている。これらの活動では、子どもたちが生き生きと楽しんで取り組む姿が見られた。今後も「またやりたいな」と子どもたちが思うような活動を工夫していきたい。

絵の具を使った活動は１学期の間継続して取り組んできたが、絵の具を見ただけで子どもたちは「今から楽しいことが始まるぞ」と活動への期待感や見通しをもてるようになったと思われる。一つの材料にじっくり取り組むことの大切さを感じた。

また、これまでの実践でいくつかの課題が見えてきた。まず、扱う材料が絵の具、粘土、紙と種類が少ないので、例えば砂、貝殻、木の実、枝などの自然の材料もその中に取り入た活動を考えたい。また、ダイナミックな活動では自ずと共同制作となりがちだが、土粘土あそびでは一人一人が粘土でじっくりあそぶ様子が見られたので、それぞれが造形あそびを楽しみ、作る楽しさを感じることをねらいとした活動も考えていきたい。

常に全員が集中して活動に取り組むということはなかなか難しく、教師がどのように楽しく雰囲気を盛り上げるか、その子らしさを引き出すためにどのように働きかけるかの難しさを感じている。

（三　宅　和　憲）

②２組（中学年）の実践

ア．目標

・身近な材料のなかでも、形や色や質感などに特徴のあるものと触れる機会を多くし、思いつく発想や連想を一人一人が自分なりに楽しむ。
・身近な用具にも触れ親しみ、いろいろな試みや工夫する楽しさを知る。
・見たこと感じたことを絵にかいたり、つくったり、飾る経験をする。
・自分の作品や友だちの作品を見る楽しさを知る。

イ．年間計画

月	題　材	材料と活動
4	土と友だち	砂、土、粘土、水で自由に遊んで… 手や足で踏んだりのばしたりして…
5	チョキチョキ、ペタペタ	いろいろな材料を切ったり貼ったりして… （紙、布、毛糸などを使って）
6	にじませて	絵の具を使っていろいろ試しながら… （水彩絵の具の効果や和紙を使って）
7	うちわをつくろう	染めた和紙や色紙やホイル紙を使って…
9	夏の思い出	貝や小石など思い出の材料を使って…
10	自然からのおくりもの	草木や木の実を並べて…
11	木と友だち ふね	いろいろな形を並べたり積んだりして… ふねをつくろう
12	木版画	彫刻刀を使って…
1	くっつけ、つながれ	いろいろな材料を集めて…
2	鬼の顔	大きな紙袋に何をしよう
3	もうすぐ春だよ	土の中の世界を想像して…

ウ．実践例

本学級の児童は３年生３名、４年生３名の計６名である。図画工作の授業は教師２人体制で月曜日に２時限続きで、教室で行なっている。

テレビで見たことや生活の中で体験したことを絵に表して楽しんでいる子。ブロックを並べて街を作ってはミニカーを動かしている子。水や砂の感触が楽しくていつも夢中になって遊んでいる子。どの子もつくったり描いたりものに触れる活動が大好きな子どもたちである。図画工作の時間でもいろいろな造形活動を経験して、自分の思いを表現することが喜びとなるようにしたい。

そこで、いろいろな材料を準備しそれを使った活動を考えた。用具を使う経験も加えながら児童一人一人が自分なりに楽しめる授業が展開できればと考えた。

ａ．「木と友だち」

10月の草木や木の実を自由に並べて造る活動「自然からのおくりもの」に続いて、11月図画工作の時間に取り組んだのが「木と友だち」であった。木は子どもたちにとって身近で親近感のある素材というだけでなく、指先に伝わる柔らかさや温もりといった触感やほのかな香りなど五感を楽しませてくれる材料である。その木と遊び、語り、自由に働きかける活動を展開してもらいたいと考えた。

第一次 … 木片ブロックを使って自由につくろう

初めに土台とするＡ４サイズのベニヤ板と様々な形、大きさに切った木片をカゴいっぱいに準備した。ある児童は、幼いときに遊んだ積み木の経験を呼び起こしたのであろう、説明を始める前から、もう積み上げ始めている。材料を見ただけで創作意欲を呼び起こしたのは素材のもつ魅力からであろう。一刻も早くつくりたい気持を制しながら、一旦子どもたちを前に集め、「木でつくろう」と提案した。木と自由にあそび、一人一人が思いついた発想で好きにつくっていいのだよと言いながら、教師が先に一つの形を例示することは良いことだろうかと悩みつつも、例として簡単な消防車を作って見せた。その後、中央に木片を入れたカゴを置き、周りを囲むように各自の座席につくように促したが、結果的には手の届きにくい場所に材料が置いてある配置になってしまった。それでも、見立て遊びのできる二人の児童はすぐに自分の必要な材料を集め、一人は消防車２台とガレージや消火栓などをつくった。また接着剤がなかなか乾かないことに苦労しながらも飛行機をつくり上げた児童や高く高く積み上げることに夢中になっている児童もいた。

しかし、一方では手が止まっている児童もいる。何をしてよいのか、初めの説明だけでは充分に理解できていなかったのであろう。もう一人の担任の教師が横にしゃがみ、ボンドをつけた木片を彼女に渡しながら一つ一つの動作に快い励ましを贈っている。やがて、することを理解した彼女は、一人で夢中になってつくりだした。「わぁ。お城みたい。すてきね。」という担任の教師の声に、他の児童も引きつけられてこの作品に見入る。自分はすぐに「これ何？」と問い掛けては説明を求めたり「もっとこうしたら」というように考えを押しつけたりしている。観た人が素直に自分の考えで何かを考えれば良いし、教師は作者の良さを最大限に認めれば良い。妙に感心するやら反省させられる時間であった。

第二次 … 木でふねをつくろう

次の図画工作の時間では、題材を「ふね」と限定してみることにした。自分自身の体験でも木で船を作ることが一番楽しかったし、できた船をみんなで浮かばせて遊ぶこともできる。つくったものを使ったり遊んだりすることは、造形活動により楽しさを与えてくれる。しかし、子どもたちにとって、どこまで「ふね」をイメージできるか心配であった。

子どもたちを前に集め、青いシートを敷き、「ここは海です」「船がやってきました」「でも、ちょっとさびしい船です」と言って、いくつかの木片を上にのせて見せた。「こんな船もあるかな」と言いながら、いくつかの例を紹介し、今日の題材「木でふねをつくろう」と提案した。子どもたちは、前回の経験があるので無理なく活動に入れた。窓や浮き輪、乗降用のデッキまでつける児童や甲板を波から守ることを意識した工夫をみせる児童もみられた。

「わぁ　すてきね」

ある児童は前回も細かい立方体や三角錐を選び、ボンドで貼ったり取り外したりしている。彼は「ふね」をイメージして、それをつくることよりも、木から伝わる指先の感触やボンドの粘着感を楽しんでいるようだった。夢中になって木やボンドと取り組んでいる姿や面白い積み方の表現をみていると、「ふね」という題材ではなく、もっと彼に合った内容があったのかもしれない。また目標の置き方によって、もっと彼の良さを引き出せたのかもしれない。一人一人の子どもたちの様子から、教師の姿勢が常に問われていることを感じた。

エ．まとめ

1組の図画工作では主として教師と一緒に造形遊びに参加し、慣れ親しみ楽しんできた活動であったが、2組では、児童一人一人の心の内に何かを感じたり生じたりしながら、手を使って遊ぶことをねらいとした。また活動の結果として自ずと作品となることがあるが、あらかじめ目的のある具体的な作品をつくることを必ずしもねらいとしないで進めたいと思った。つまり、児童が自分でつくりたいものを見つけ、自分なりにつくりながら工夫してつくることそのものを楽しむことを大切にしたいと考えた。そのことは、見立てることが難しい児童にとっても、材料に触れ指先から思いつく発想や連想を一人一人が自由に楽しめる活動になると思う。しかし一方、初めにおよその目的や具体的な主題やテーマがあった方が分かりやすく、目的に向かって夢中になって取り組むことができる児童がいることを忘れてはならない。一人一人に応じた、適切な指導内容や計画・評価が必要である。

同じ学級で同じ活動を展開できる図画工作は、児童一人一人の感じ方や表現を教師が理解し、その子の良さを認めることが大切である。また、その共感的な姿勢が他の児童にも伝わり、友だちを互いに認め合う関係を作ることにもつながると気づかされた。

（松　本　賢　二）

③３組（高学年）の実践

ア．目標

・いろいろな材料や用具の扱いや活動をさらに経験し、形や色や質感などに慣れ親しむ。
・見たことや感じたことを自分なりの方法で絵にかいたり、つくったり、それを飾ったり、使ったりする。
・友だちの作品や身近な社会にあるいろいろな造形品を見る楽しさを知る。

イ．年間計画

月	題　材	材料と活動
4	サクラをみんなで描こう	スタンピングで版にしながら…
5	こいのぼり	絵の具のグラデーションを使って… 模様とはじき絵の効果を知ろう
6	粘土 レリーフの壁画	粘土であそぼう 道具を使って粘土に何をしよう
7	七夕かざり	切ったり貼ったり折ったりして…
9	ぶどう 夏休み工作展	スタンピングや色の変化を利用して描こう いろいろな作品を観てこよう
10	わたしの顔	ちぎった色紙や毛糸を使って…
11	木と道具 県立美術館へ行こう	いろいろな道具に慣れ親しもう 地域にある造形品を観てこよう
12	皿と器（やきもの）	粘土でたたら板づくりや模様を描こう
1	そり	木と道具を使って、みんなで…
2 3	おくりもの	友だちに残すものをつくろう

ウ．実践例

本学級の児童は５年生３名、６年生３名の計６名である。図画工作の授業は教師２人体制で木曜日に２時限続きで、教室で行なっている。

折り紙を正確に半分に折ることができたり、新聞広告のチラシを手で切って正確な正方形をつくる子。刷毛で色を塗ったり場所がはっきりしている貼り絵では夢中になって取り組める子。みんな描いたりつくったりすることが好きな子どもたちである。今までの経験を基に、より造形活動の楽しみを深めたり広げたりしながら、表現することが喜びとなるようにしたいと思う。

そこで、新しい材料や用具・方法などを子どもたちに提示する場合は、導入段階で充分に材料と触れ合い、体験としての感覚や気づきといったものを大切にした自由遊びにした。また子どもたちの見かたや感じかたの様子をゆっくりと観察しながら、児童一人一人が自分らしさを発揮できる活動を展開していきたいと考えた。

ａ．「粘土」「皿と器（やきもの）」

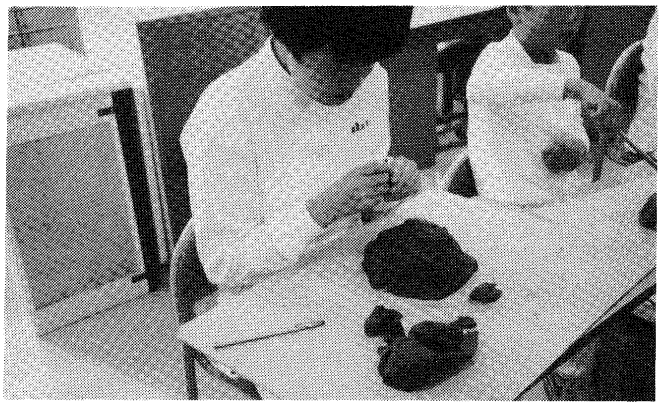
粘土は、手で触れることにより、指先を通してその肌ざわり、重さ、かたさ、やわらかさが直接伝わる。また可塑性に富み、表現意図を容易に表すことができる材料である。

第一次 … 粘土で遊ぼう

それまで授業を始めるときは、黒板の前に全員が集まり、教師の説明を聞いて一人ずつ順番に前に出て行なう形態をとってきた。活動の内容が分かりやすく、友だちの様子を見ながら見通しをもてる良さがある。しかし、粘土という素材は経験もあり、机上の材料として取り組みやすく、またつくるものも自由であるという設定なので、そのまま各自の机に大きな粘土板と４Kg程度の信楽粘土を配した。子どもたちは、すぐに叩いたりちぎったり、丸めたりといった活動を始めた。教師もまた一緒になって、自由に粘土と遊んだ。粘土の感触や可塑性は、子どもたちに無理なく受け入れられ、一人一人がそれぞれの方法で夢中になって取り組む姿勢が見られた。

第二次 … 道具を使って、粘土に何をしよう

粘土べら、型抜き、のし棒、糸などといった簡単な道具を準備し、子どもたちに、それらの道具を自由に選択し使えるようにした。前回の活動では、丸めることに夢中になったり、それをどんどん上に積み重ねて遊んでいた児童がへらを使って線を入れたり、くり抜いたりといった工夫を加わえた。また、初めは道具に興味を示さなかった児童も教師や友だちが次々と道具を使っている様子を見て、のし棒を使ってのばしたり丸めたりし始めた。道具を使ったことで、子どもたちの粘土に働きかける新しい一面を見ることができた。



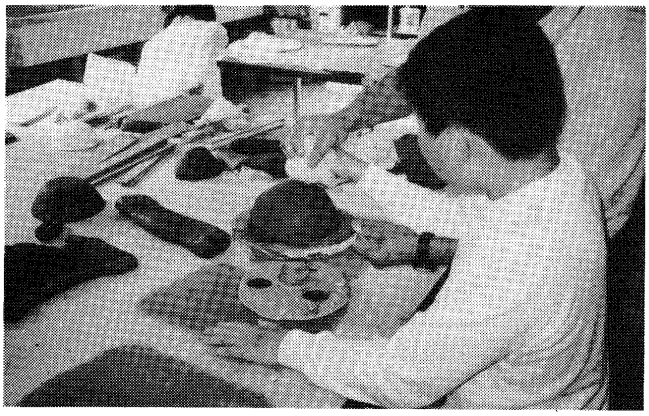
「道具を使うと　おもしろいゾ」

第三次 … レリーフで表そう

子どもたちの自由な表現を何らかの作品として残したい。そう考えて粘土を厚さ２cm程度の板状にしてレリーフという表現題材を子どもたちに提示した。つくったり、描く主題はあえて提示せず、今までと同じように自由に粘土や道具を利用してそれぞれの表現方法で取り組ませてみた。平面化した粘土の土台が準備されたことで、小さく丸めた粘土や握った粘土を上へ上へと重ねることに夢中になっていた児童が紐状にしてのばしたり貼りつけたりといった新しい姿を見せてくれた。またある児童は、鉛筆や筆では見せてくれなかったダイナミックで力強い線をへらや釘を使って楽しそうに表現していた。

第四次 … 粘土で皿や器をつくろう

粘土を使った２回目の活動は１１月に入ってから行なった。「使うものをつくろう」という提案として、お皿や器などを選択してつくることにした。はっきりとした使用目的とそれにあった形があるため、子どもたちにもつくるものが分かりやすいと考えたからである。ところが、使用に耐えるためには焼き物にしなければならない。乾燥や焼成という過程があるため、厚さをできるだけ均一にして締めるという制約がある。そのため比較的簡単な方法の石膏型を利用したたたら板づくりに取り組ませることにした。また、作業性を考えて初めて図工室を利用した。ところが、子どもたちは、今までのように自由に引っ掻いたりちぎったり丸めたりという活動が制約されたり、型にのせて周りを手加減しながら押さえ込んでいくという作業が難しかったのだろうか、落ち着かず、取り組む姿も期待とは違ったものになってしまった。



「ろくろを使ってトントントン」

エ．まとめ

高学年になると体も大きくなり指先の巧緻性も高まり、扱える材料や用具も増えてくる。また、他の友だちや教師と一緒に生活してきたことで、次第に他を意識し、受容する姿もみられるようになってきた。そこで、一人一人の自分らしさを大切にしながらも、目的や用途に応じて工夫するといった表現活動も少しずつ増やしたいと考えた。

ところが、皿や器にしようという教師の意図が先に出てしまったことや複雑な技法や工程が一度にたくさん出されたことで、子どもたちの伸びやかな姿は消えてしまった。言い換えるなら、目的に合わせて作らせようとして、子どもたちに受け入れられなかったと反省している。そして、何よりも子どもたちが「描いてみたい、つくってみたい、飾ってみたい」といった意欲を引き出せるような内容の選択や子どもたちへの働きかけが必要だということを改めて考えさせられている。

（松　本　賢　二）

3．まとめと今後の課題

平成12年度の教育課程再編を目指して小学部では昨年度「からだづくり」という視点から体育や養護・訓練の中の運動・動作、それに体育的行事等について見直し、一定の成果をあげることができた。

今年度は「教科の指導」として主に「音楽」「図画工作」それに「生活」（「基本的生活習慣」は除く）を取り上げ、実践の中での児童の様子を報告しあってきた。その中でそれぞれの学習活動が学級（学年）間で関連があること、そして活動の内容やねらいが質・量とも学年を経るにしたがって高まってきていることに気づいた。具体的には「生活」の中の調理的な学習で低学年では材料をかきまぜる、調理器具を運ぶ等が中心的な内容であるのに対し、中学年では自分たちで材料を買ってきて作る、高学年では包丁などの調理器具を使って作るという活動になっている。また「図工」で低学年は感覚遊び的な内容が中心であるが中学年ではいろいろな材料を多く取り入れて楽しみ、高学年では目的をもった造形活動をしている。「音楽」においても楽器遊び中心の低学年に対し、中学年では音楽に合わせてリズム楽器を鳴らす、高学年では旋律楽器もその視野に入れている、などである。例年、当然のこととして児童の実態から考えられている各学級の学習内容であるが、話し合いをしてきて改めて指導内容や方法を決めていく観点として「生活年齢（学年）は見逃すことができない」ということを再確認したと言える。

そこでこの生活年齢重視の確認を踏まえて各学級毎に各教科の指導目標を考え直すことにした。そして目標を決める際「複式学級」ならではの悩みを抱えながらも各学級間の系統性をもった目標になるよう話し合いを重ねてきた。というのもこの目標は言わば「児童一人一人の６年間の目標の集まり」とも言えるものだからである。その意味できちんとした学級目標は個別の指導計画にも直結するものであると言えよう。

１年生、２年生というようにそれぞれの学年のうちに取り組んでいくこと、また低学年、中学年という２年単位で積み重ねていくこと、高学年になって初めて取り組むこと、さらに６年間で力をつけていきたいこと（目標）をきちんと整理した上で、今どのような活動を行っていくかを考慮していくことが大切である。これを言い換えるなら「指導の適期を逃さないようにする」ということであろう。今回この部分で共通理解をし、小学部としての系統的な指導目標を立てることができたのは大きな成果であると思っている。

文部省より新指導要領が告示され、その趣旨を考え合わせながらの模索であったので話し合いが十分であったかどうかについては即断できない。また学校週５日制の完全実施を間近に控え、今後の課題は少なくない。現行の時間割や単位時間の長さは今のままでいいのか、まだ取り上げていない国語や算数、道徳や特別活動はどう考えるべきか、「自立活動」の内容・方法等の問題、さらには「個別の指導計画」等、難問が山積している。教育課程再編を１年後に控え、どこまでできるかといった不安があることは否めない。しかしこの与えられた難問をむしろエネルギーに変えて、来るべき新時代に十分応えることができる学校、保護者や他校の教師らがいつでも集まり相談できる学校を目指していきたいものである。「学校を変えるなら今だ！」という気持ちをもちつつ、これからも取り組んでいきたい。

（石　井　雄　史）

小学部研究　参考文献一覧

1）金沢大学教育学部附属養護学校　平成６年度研究紀要
2）金沢大学教育学部附属養護学校　平成７年度研究紀要
3）金沢大学教育学部附属養護学校　平成８年度研究紀要
4）金沢大学教育学部附属養護学校　平成10年度研究紀要
5）『盲学校、ろう学校及び養護学校小学部・中学部学習指導要領』（1999）文部省
6）『特殊教育諸学校　小学部・中学部学習指導要領解説』（平成３年）文部省